

## 固有名詞 Renart と普通名詞 renard の間

原野昇

動物の狐は現代フランス語で renard と言うが、古くは goupil (<vulpiculus, vulpes の縮小辞)と呼ばれていた。『狐物語』*Le Roman de Renart* が成功を博し、固有名詞 Renart の名が広く人口に膾炙した結果、goupil が renard にとって代わられたということはよく知られている。しかし、具体的にはいつごろ、どのようにしてであろうか。

O. Block & W. v. Wartburg の語源辞書は「11 世紀から 17 世紀の間、goupil は renard と並行して使用され、ついに後者によって駆逐された」と記述している<sup>1)</sup>。また、普通名詞 renard (renart) の初出例の年代として、FEW<sup>2)</sup>と Gamillscheg の語源辞書<sup>3)</sup>は 13 世紀、A. Dauzat<sup>4)</sup>は 13 世紀半ば、A. Rey<sup>5)</sup>は 13 世紀前半、O. Block & W. v. Wartburg は 1240 年としている。TLF<sup>6)</sup>は、*savoir de renard* «être maître dans l'art de tromper» の用例として *Roman de sept sages* (13 世紀初頭) を、形容詞 «rusé, fourbe» の意味での用例として Gautier de Coinci (1223 年頃) を、名詞の用例として Rutebeuf, *Du Pharisien* (1259 年頃) をあげている。

上記の辞書の記述では、普通名詞 renard の最も古い用例の年代は 1223 年頃 (Gautier de Coinci) であり、それは『狐物語』の最古の枝篇群が現れて (1175 年頃) から約 50 年後ということになる。このあたりの事情をもう少し詳しくみるために、以下では、固有名詞 Renart の普通名詞化に影響したと思われる Renart の派生語 renardeau と renardie の用例を、『狐物語』自体の中においてみていく。これらの派生語は固有名詞 Renart と普通名詞 renard の橋渡しの役割を演じたのではないかと思われるからである。

### 1 Renardeau

γ 版<sup>7)</sup>では、goupil は 51 例 (gorpil : 46 例, gorpill : 2 例, gorpilz : 2 例, gorpieux : 1 例) 見られるが、普通名詞 renard の例は当然のことながらゼロである。すなわち動物の狐を指すためには常に goupil が使用されている。

それに対し、renardeau (renardiaux) は γ 版で 2 例、その他も入れると 3 例見られる。これらについて詳しくみていくことにする。

#### (1) 第 VI 枝篇の例

第1例は第VI枝篇「ルナールとイザングランの決闘」に見られるものであり、次のようなものである。

Hermeline fu en freor  
 Por dant Renart et en peor ;  
 Mout par estoit la dame franche.  
 Et Percehaie et Malebranche  
 Et *Renardi*x, tuit li .III. frere,  
 Fesoient grant duel por lor pere,  
 Avec lor mere en la tesniere  
 Por Renart font a Dieu priere ;  
 Chascun le proie et aoure  
 Que il le garisse et secore,  
 De son anemi l'escremisse,  
 Qu'en bataille ne le perisse.  
 Aussi si fil en sa meson  
 Font chascun a Dieu oroison  
 Por le pere qui tant les ainme ;  
 Quant il les voit, biax filz les clainme. (vv.15,035-50)

父親ルナールの決闘を前にし、Percehaie, Malebranche, Renardi*x* の3人の息子もみな、母親Hermelineとともに、父親のために神にご加護を祈っている場面であり、Renardi*x* は明らかに固有名詞でRenartの息子のうちの一人の名前である。語源的にはもちろん「小Renart, 子供のRenart, Renartの息子, 二代目Renart」といった意味で、いずれにしても固有名詞である。

しかしすべての写本が上記のようなテキストをもっているわけではない(表1参照)。第VI枝篇を含んでいる写本は13ある(A, D, E, F, G, B, K, L, C, M, H, I, O)が、そのうちの7写本(A, D, E, F, G, H, I)においては、γ版でRenardi*x*が現れている15,039-40の2行が欠けている。例えばA写本では次のようになっている。

Hermeline fu en peor  
 Por dan Renart et en freor,  
 Et Percehaie et Malebrance.

Molt par estoit la dame france.  
 En crois s'estent en sa tesnere,  
 Por Renart fet digne proiere. (fol.46c, l.-9--4)

したがって問題の2行を含む写本は B, K, L, C, M, O の6写本のみである。ところが、さらにそのうち L, O の2写本においては、Renardix という語は見られず、代わりに Rovel となっているのである。

L : Et Rovel tuit li .III. frere (7音節) (fol.24d, l.7)  
 O : Et Rovel trestuit li .III. frere (fol.17e, l.-12)

結局 Renardix という語を含む写本は、B, K, C, M の4写本のみということになる。そしてこれら4写本はβ群(B, K)とγ群(C, M)に属する写本であり、最も初期の写本とみなされているα群の写本は1つもない。すなわち、初期においてはこの2行はなかったところに、後に追加された可能性がある。

さらに、Renardix 以外に Rovel をもっている写本が存在するということは、Renardix を Renart の息子の名前の固有名詞として使用することに躊躇を覚えたからかも知れず、躊躇したとすれば、その背後に、Renardix が普通名詞ととられはしないかという心配があったということになろう。

## (2) 第1a枝篇の例

ルナールの息子の名前は3人あげられている場合が多い。その場合、Percehaie と Malebranche はほぼ一定しているが、3番目の息子の名前は揺れている。Renardix 以外に、第1例における L, O 写本と同じ Rovel, さらにそのほかにも、Ronel, Roussiex, Rousel, Jounaux なども見られる<sup>8)</sup>。例えば第1a枝篇で、γ版では、

.III. filz avoit la dame franche :  
 C'est Percehaie et Malebranche,  
 Et li tierz ot a non Rousiex : (vv.7261-64)

となっているが、他の写本では次のようになっている。

A : Et li tiers si a nun Ronel

- D : Et le tiers si a non Rouvel  
 E : (mq.)  
 N : Et le tiers a nom Roonel  
 F : Le tiers a nom Rouenel (7 音節)  
 G : Et li tiers a non Ronel  
 B : Li tierz avoit non Renardiaus  
 K : (mq.)  
 L : Li ainz nez avoit non Loveax  
 C : Et li tierz ot a non Rousiax  
 M : Et li tierz ot a non Roussiax  
 H : Li tiers ot a non Renardiaus  
 I : Et li tiers avoit non Jounaux  
 O : Et li tiers si ot non Rovel

Martin 版は、et li tiers si a nun Rovel としている。Roonel (N) というのは【狐物語】の中で犬(番犬)の名前として頻出するので、Ronel (A, G), Rouenel (F) とともに紛らわしく、そのことを知る写字生はルナルの息子の名前としては躊躇するであろう。いずれにしても、Ronel, Roonel (Rouenel), Rovel (Rouvel), Renardiax (Renardiaus), Loveax, Roussiax (Rousiax), Jounaux と主な形だけでも7種類もあり、非常に揺れていることがわかる。そのうち Renardiax というのが Renart の三番目の息子の名前としているのは B, H の2写本しかない。そして B, H 以外の写本、すなわち Renart の三番目の息子の名前として Renardiax 以外の名前をもっている写本においては、Renardiaus が普通名詞ととられはしないかと心配したという可能性を排除できない。

同時に B, H の2写本においては、明らかに Renardiax (Renardiaus)がルナルの息子の固有名詞として用いられている。

それに対し、次の第3例では renardiax が普通名詞として用いられている可能性がある。

### (3) 第 XVII 枝篇の例

第3の例は第 XVII 枝篇「ルナルの死」にみられるものである。

Quant ele (=Hermeline) a aparceu la teste

Qu'il (=Renart) avoit si mal atournee,  
 Adonc a grant douleur menee ;  
 Ausi firent les *renardiaux*,  
 Grant fu la crïee et li diax ;  
 En .I. lit l'ont couchié et mis. (vv.25,578-83)

ルナールの妻 *Hermeline* は、夫が目をえぐられ耳を裂かれているのを見て心を痛めた。「*renardiaux* もそうであった」というものである。この場合もなお、固有名詞 *Renart* の縮小辞として、「小狐」ではなく「ルナールという名前の人物の子供、小ルナール」ととれなくはないが、動詞が複数形 (*firent*) なので、普通名詞「小狐たち」がイメージされて用いられている可能性が高い。たとえ「小狐たち」(普通名詞)ではなく「小ルナールたち」(固有名詞)として用いられているとしても、複数形で用いられていることによって、その固有名詞性は薄くなっていると考えてよからう。なぜなら、固有名詞は本来、個々の個体・個人を識別するのが大きな特徴であるからである。

そうするとこの例は *Renardel* が普通名詞(「小狐」*renardeau*)的に用いられている最初の例であるかも知れない。第 XVII 枝篇の創作年代は、*Lucien FOLET* によれば 1205 年ころである。

しかし、写本を詳細に検討してみると、第 XVII 枝篇を含んでいる写本は N, B, C, M, H の 5 つであるが、B, C, M, H の 4 写本ではこの箇所が欠落しており、この箇所を伝えているのは N 写本のみである。ということは、この箇所が N 写本で初めて挿入された可能性が排除できないということになる。ちなみに、N 写本は 14 世紀に作成された写本とされているので、その場合には、この用例はそれほど古いものではないかも知れない、ということになる。

以上の 3 つ例から言えることは、第 1 および第 2 例においては、写本によって、(1) *Renardiau* が固有名詞として、*Renart* の三番目の息子の名前として明らかに使用されている例があること、(2) しかし、それらいずれの例においても *Renardiau* をもっている写本は少数であり、第 1 例では、14 写本中 4 写本のみ、第 2 例では 2 写本のみである。(3) したがって、*Renart* の三番目の息子の名前として *Renardiau* 以外の名前を入れている写本においては、その写本制作者が *Renardiau* を固有名詞として扱うことに躊躇した可能性があり、その躊躇の要因として、*Renardiau* が普通名詞 *renardeau* と混同されはすまいかという心配があった可能性が排除できない。(4) 第 3 例では *renardiaux* をもっている写本は 1 写本のみであるが、そこに

おいては *renardix* が普通名詞として用いられている可能性が高い。

結局以上の3例は、*renardiau* の普通名詞的とらえ方の芽生えと考えることができるのではなからうか。

## 2 Renardie

次に *renardie* «*ruse, tromperie*»についてみていくことにする。というのも、この語も、固有名詞 *Renart* から普通名詞 *renard* への変化の過程において大きな役割を果たしたと思われるからである。*renardie* は *Renart* という名前の人物が行う«*ruse, tromperie*», すなわち特定の個人に固有の属性を指すのか、それとも狐 *renard* のもっと一般的な属性を意味するのかが、少なくともその用例の当初にあっては、曖昧であったのではないと思われる。

『イセングリムス』*Ysengrimus* 以来、狐ルナール（レイナルドゥス）は、人をだますことのみを考える悪知恵、悪巧みの主、といった役回りである。そのくせだましたつもりがだまされていたり、たびたび失敗もやらかす滑稽な側面もあり、憎めないところがある。このような役柄の登場人物に狐が割り当てられたのは偶然であろうか。それとも何らかの理由があつてのことであろうか。おそらく後者だと思われる。農家や修道院の鶏小屋が狐に襲われるので、その対策をたてしっかり防御していても、狐がその裏をかいて鶏をまんまと失敬する、ということもあつたであろう。狐と人間との知恵比べである。また狐は死んだふりをすることがあると言われるが、そのような経験もたびたびしたのではなからうか。おまけに狐は狼などに比べれば、体格は小さい方なので、力の点で人間に勝っているとは言えない。それにもかかわらず、大事な鶏を盗む泥棒であり、なかなか手強い相手である。その際、力の象徴ではなく、悪知恵、ずる賢さの象徴としてうってつけだったのでなからうか。おまけに *Renart* の後半部 *-art* (*-ard*) は語源的にはゲルマン語の *Hart* 「力」に由来するものであるが、*richard* 「成り金」、*campagnard* 「田舎っぺ」のように軽蔑的な意味を付加する接尾辞 *-ard* と同音、同綴である。

そうすると、*renardie* は (1) 「*Renart* という名前の人物に固有の性質、特徴」、(2) 「*Renart* という名前の狐の性質、特徴」、(3) 「狐一般の性質、特徴」のどの意義特徴を表わすための派生語なのであろうか。時代とともに (1) から (3) へと変化していったということも考えられるし、最初からそれらを同時に表わしていたかも知れない。いずれにしても、固有名詞 *Renart* から普通名詞 *renard* への変化、すなわち *goupil* と *renard* の競争において *renard* が勝利していく過程で、*renardie* の使用は大きな役割を果たしたのではなからうか。

renardie の用例は『狐物語』（γ版）の中に 3 例ある。それらを見ていくことにする。

(1) 第 VI 枝篇の例 (1)

VI 410 (γ : 14,424)

	Honte m'a fet et vilanie	
	Trop ai sofert sa renardie	
Martin	Trop ai sofert sa felonie	VI 410
Roq.	trop ai soufert sa renardie	VIII 7684
A	Trop ai sofert sa felonie	(fol.43a, 1.4)
D	Trop ai souffert sa grant folie	(fol.39a, 1.26)
E	Trop ai soufert sa grant folie	(fol.8d, 1.14)
F	Trop ay souffert sa folie	(fol.52d, 1.14 ; 7 syl.)
G	Trop ai sofert sa grant folie	(fol.58c, 1.21)
N	<i>mq.</i> (cette branche)	
B	Trop ai soufert sa renardie	(fol.65a, 1.-5)
K	<i>mq.</i> (ces deux vers)	(fol.255f, après 1.6)
L	Trop ai soffert sa ribaudie	(fol.21c, 1.-3)
C	Trop ai sofert sa renardie	(fol.92a, 1.-11)
M	Trop ai sofert sa renardie	(fol.119d, 1.15)
H	Trop ai soffert sa felonie	(fol.23c, 1.25)
I	<i>mq.</i> (ce passage)	(fol.70c, après 1.2)
O	Trop a duré sa renardie	(fol.15e, 1.-8)

この枝篇が含まれている 13 写本 (A, D, E, F, G, B, K, L, C, M, H, I, O) のうち 1 写本 (I) ではこの箇所が含まれておらず, 1 写本 (K) では当該の 2 行が含まれていない。残る 11 写本のうち, renardie という語をもっているのは 4 写本 (B, C, M, O) であり, 他の 7 写本は別の語をもっている。すなわち, 4 写本 (D, E, F, G) は folie, 2 写本 (A, H) は felonie, 1 写本 (L) は ribaudie である。

この例では renardie という語が, 上記の (1) ~ (3) のいずれの意味においても, 単語としてそれほど定着していなかったのではないかと推測される。ちなみに,

renardie という語が用いられている写本はすべて  $\beta$  群および  $\gamma$  群の写本ばかりであり、 $\alpha$  群の写本で renardie という語をもっている写本は一つもない。

(2) 第 VI 枝篇の例 (2)

VI 780 ( $\gamma$ : 14,908)

	Quant m'estordras, que que nus die, Petit savras de renardie.»	
Martin	Petit valdra ta renardie	VI 780
Roq.	<i>mq.</i> (ces deux vers)	VIII
A	Petit valdra ta renardie	(fol.45d, l.2)
D	Petit saras de renardie	(fol.41b, l.-7)
E	Petit saras de renardie	(fol.37a, l.18)
F	Petit savras de renardie	(fol.55a, l.18)
G	Petit savras de renardie	(fol.59d, l.18)
N	<i>mq.</i> (cette branche)	
B	<i>mq.</i> (ces deux vers)	(fol.68b, après l.6)
K	<i>mq.</i> (ces deux vers)	(fol.257a, après l.6)
L	<i>mq.</i> (ces deux vers)	(fol.24a, après l.4)
C	Petit savras de renardie	(fol.95a, l.-7)
M	Petit savras de renardie	(fol.123a, l.-5)
H	Petit savras de renardie	(fol.26a, l.-7)
I	<i>mq.</i> (ces deux vers)	(fol.71d, après l.4)
O	Petit vaudra ta renardie	(fol.17b, l.-10)

この例は第 1 の例と同様に第 VI 枝篇にみられるものであるが、写本によるばらつきはかなり異なっている。すなわち、この行をもっている写本は 9 写本 (A, D, E, F, G, C, M, H, O) あるが、それらすべてが renardie という語をもっており、揺れ (異訓) がまったくない。ただし、 $\beta$  群の写本 (B, K, L) と H 写本は当該の 2 行をもっていない。

(3) 第 IX 枝篇の例

IX 1617 ( $\gamma$ : 18,165)



	Trop set Renart de renardie, Nule beste n'est si hardie	
Martin	Que trop set Renart renardie	IX 1617
Roq.	trop set Renart de renardie	X 10,859
A	Que trop set Renart de renardie	(fol.81d, 1.13 ; 9 syl.)
D	Que trop set Renart renardie	(fol.85b, 1.22)
E	Que trop set Renart renardie	(fol.29c, 1.-6)
F	Car trop sceit Renart renardie	(fol.39c, 1.-6)
G	Que trop set Renart renardie	(fol.44c, 1.13)
N	<i>mq.</i> (ce passage)	
B	Trop set Renart de renardie	(fol.94b, 1.20)
K	<i>mq.</i> (cette branche)	
L	Trop sot Renart de renardie	(fol.101b, 1.-7)
C	Trop set Renart de renardie	(fol.115c, 1.23)
M	Trop set Renart de renardie	(fol.123a, 1.-5)
H	Que trop set Renart renardie	(fol.88c, 1.-8)
I	<i>mq.</i> (ce passage)	
O	Trop set Renart de renardie	(fol.45d, 1.15)

この例でも、この行を含む 10 写本 (A, D, E, F, G, B, L, C, M, O) すべてが *renardie* という語を用いており、異訓がまったくない。しかも、それらの写本は  $\alpha$  群,  $\beta$  群,  $\gamma$  群のすべてに属している。

*renardie* に関して言えば、第 2, 第 3 の例のように、写本間で揺れがなく、写本制作者がこの語を使用するのに何らの抵抗も躊躇も感じていないのではないと思われる例がある一方、第 1 例のように、写本間で揺れがあり、写本制作者がこの語を使用するのに何らかの抵抗感あるいは躊躇を感じたのではないと思わせる例もある。

いずれにせよこれら 3 例はいずれも、*renardie* の上記 3 つの意味のうちの (1) 「Renart という名前の人物に固有の性質, 特徴」のみを表わしているとは断定できず、(2) 「Renart という名前の狐の性質, 特徴」、あるいは (3) 「狐一般の性質, 特徴」の意味で用いられているととってもまったく不自然ではない。したがってこれらの *renardie* 用例も *renard* が *goupil* と同じ意味、すなわち「狐」を表わす普通名

詞として用いられていくことを側面から助長したのではなからうか。

(表1)

renardiaus, renardie

ms	renardiaus			renardie		
	VI 909	I 1605	XVII γ 25581	VI 410	VI 780	IX 1617
A	X(ces 2 vers)	Ronel		felonie	renardie	renardie
D	X(ces 2 vers)	Rouvel		folie	renardie	renardie
E	X(ces 2 vers)	×		folie	renardie	renardie
N		Rooneel	renardiax			×
F	X(ces 2 vers)	Rouenel		folie	renardie	renardie
G	X(ces 2 vers)	Ronel		folie	renardie	renardie
B	Renardiaus	Renardiaus	×	renardie	×	renardie
			(ce passage)		(ces 2 vers)	
K	Renardials	×		×	×	
				(ces 2 vers)	(ces 2 vers)	
L	Rovel	Loveax		ribaudie	×	renardie
					(ces 2 vers)	
C	Renardiax	Rousiax	×	renardie	renardie	renardie
			(ce passage)			
M	Renardiax	Roussiaux	×	renardie	renardie	renardie
			(ce passage)			
H	X(ces 2 vers)	Renardiaus	×	felonie	renardie	renardie
			(ce passage)			
I	X(ce passage)	Jounaux		×	×	×
				(ce passage)	(ces 2 vers)	(ce passage)
O	Rovel	Rovel		renardie	renardie	renardie

注

- 1) Oscar BLOCH & Walter von WARTBURG, *Dictionnaire étymologique de la langue française*, PUF, 1932. XI<sup>e</sup>-というのは *Roman de Renart* 以前, Raynardus などのことか。
- 2) W. von WARTBURG, *Französisches Etymologisches Wörterbuch*, 16 Bad, 1959.
- 3) Ernest GAMILLSCHEG, *Etymologisches Wörterbuch der Französischen Sprache*, Heidelberg, 1969.
- 4) Albert DAUZAT, *Nouveau Dictionnaire étymologique et historique*, Larousse, 1971.
- 5) Alain REY, *Dictionnaire historique de la langue française*, Paris, 1992

6) *Trésor de la langue française*,

7) Noyuki FUKUMOTO, Noboru HARANO & Satoru SYZUKI (éd.), *Le Roman de Renart édité d'après les manuscrits C et M*, 2 vols., Tokyo (France-Tosho), 1983,1985. なお, HARANO Noboru & SHIGEMI Shinya, *Concordance du Roman de Renart d'après l'édition γ*, Hiroshima (Keisuisha), 2001 参照。

8) 【新作ルナール】 *Renart le Nouvel* では Renardel がルナールの息子の名前として恒常的に出てくる。例えば, A tant es vos Renardel, le fil / Renart (v.5076)。

## Entre le nom propre *Renart* et le nom commun *renard*

Noboru HARANO

L'animal nommé aujourd'hui "renard" s'est d'abord appelé "*goupil (vulpiculus)*". Le mot *goupil* a été éliminé et remplacé par *renard* à cause du grand succès du *Roman de Renart* sans qu'on sache à quel moment précis et selon quelles modalités s'est opéré ce remplacement.

La date la plus reculée que donnent les dictionnaires sur l'emploi du mot *renard*, nom commun, est vers 1223 (Gautier de Coinci), soit à peu près 50 ans après la première apparition des branches du *Roman de Renart* vers 1175. Nous allons voir dans quelle situation linguistique le nom propre *Renart* allait être pris comme nom commun *renard* en examinant des mots dérivés de *Renart (renard)* : *renardeau* et *renardie*. Nous pensons que ces mots dérivés sont des mots intermédiaires entre le nom propre *Renart* et le nom commun *renard* et ont contribué à rendre ce premier nom commun.